

李華の思想と文学

劉, 三富
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9806>

出版情報：中国文学論集. 4, pp.62-71, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

李華の思想と文学

劉 三 富

李華、字は遐叔。趙州贊皇（現在の河北省贊皇県）の人。生年は詳かではないが、歿年は大曆の初（七六年頃）といわれている。しかし、『李遐叔文集』の「太子少師崔公墓誌銘」に「大曆四年、龜筮從吉、嗣子圓尚書右僕射趙國公云云」と書かれているところから、李華の歿年は少なくとも代宗の大曆四年（七六九）以後のことであると考えられる。

李華の家系や青少年期の生活については殆んど不明である。家系については、僅かに独孤及の「趙郡李公中集序」の中に「趙郡人安邑令府君第三子」と見えるだけであるし、李華自身の作品の中からも窺うことができない。

『旧唐書』李華伝によれば、李華は開元二十三年（七三五）に蕭穎士や賈至らとともに進士に及第している。その当時の李華について、彼が当時屈指の文章家として蕭穎士とともに称賛されていたことを伝えるエピソードが残っている。『旧唐書』李華伝にいう。

華善属文、与蘭陵蕭穎士友善、華進士時、著含元殿賦萬餘言、穎士見而賞之曰、景福之上、靈光之下。

このことから、李華と蕭穎士とが非常に仲の良い友人であったことがわかる。李華は進士に及第したとき「含元殿賦」を著わした。蕭穎士はこれを評して「景福より上手だが、靈光には劣っている」と言っている。ここにいる「景福」とは三国魏の何晏の作「景福殿賦」のことであり、「靈光」とは後漢の王文考（王逸の弟）の作である「靈光殿賦」のことであって、いざれも「文選」に収められる秀れた作品である。蕭穎士は李華の「含元殿賦」がこうした「文選」の作品に比肩すべき優秀な作品として評価しながら、なお率直な批評を与えたのである。これによって、李華は一層発憤して遂にあの古今に著名な「弔古戰場文」を著したのである。李華がこの「弔古戰場文」にかけた意気込みは大変なものであったらしく、『旧唐書』本伝に華文体温麗少宏傑之氣、穎士詞鋒俊發、華自以所業過之、

疑其誣詞、乃為祭古戰場文、燻汗之如故物、置於佛書之閣、華与穎士因閱佛書得之、華謂之曰、此文何如、穎士曰、可矣、華曰、當代秉筆者誰及於此、穎士曰、君稍精思便可及此、華愕然。

という興味ぶかいエピソードが伝わっているほどである。この作に対しても蕭穎士は更に「君ももう少し思を^{しん}を^{しん}を^{しん}了したら、当代に見当らない名文になったであろう」と評価を加えている。

これらの逸話から見ても、李華と蕭穎士とがいかに相互に厳しい批判を加え合いながら文章を磨き合っていたかが窺えると同時に、忌憚のない批評ができあう程の交情の深さが感じられる。

その他の交友関係をみてみよう。「唐書」蕭穎士伝にそれを知ることがかりになる資料に次のようなものがある。

嘗兄事元德秀而友殷寅・顔真卿・柳芳・陸據・李華・邵軫・趙驊、時人語曰、殷顔柳陸李蕭邵趙以能全其交也。所與遊者孔至・賈至・源行恭・張有略・族弟季迥・劉穎・韓拯・陳晋・孫益・韋建・韋收・独鶯鸞齊名、世号蕭李。

この殷寅・顔真卿・柳芳・陸據等については「旧唐書」や「唐書」からそれぞれの伝にさぐってみると次のような記述が見られる。

殷寅：其後侍蕭疾、不脱衣者数年、有白与其楣。（「唐書」卷一九九）

顔真卿：清臣富於学、守其正、全其節、是文之傑也。（「旧唐書」卷一二八）

柳芳：肅宗詔芳与韋述綴輯吳兢所次国史、会述死、芳緒成之、與高祖訖乾元凡百二十篇。（「唐書」卷一

三二）

蕭穎士：穎士与華據游洛龍門、讀路旁碑、穎士即誦、華再

閱、據三乃能盡記、聞者謂三人才高下、此其分也。

（「唐書」卷二〇二）

陸據：開元天宝間、文士知名。（「唐書」卷一九〇下）

とりわけ李華が蕭穎士・陸據と三人で洛南の龍門に遊び、路辺の古碑を誦することを競いあつたことなどからみても、当時学問文学を愛好する者の間にそれぞれの才能を認めあいながら交友が深められ、その交友関係が生涯全うされてきたことがわかる。

その後、李華は博学宏詞科に合格、天宝十一載（七五二）に監察御史の官についている。そのとき、李華は当時専横を極めていた楊国忠一族を弾劾したため補闕に左遷されてしまう。因みに楊氏一族の専横ぶりを「資治通鑑」の中に見てみると、楊貴妃の兄にあたる楊国忠の權勢は朝廷で絶対的なものであつたとみえ、楊氏一族の目に余る横暴の幾つかの事例があげられている。その一つに「資治通鑑」の天宝七載の項によると、一族の中で相互に贅沢を競い、遂には邸宅を建てるとしても、他の邸宅で自分達のそれより立派なものと、早速それを破壊し、その材料で自分たちの家を造ってしまったといわれる。

李華はそのままの職で天宝十四載（七五五）におこつた安祿山の叛乱を迎えるが、そのとき彼は逃げおくれた母親を助けに戻つたために、賊に拘えられて、無理矢理に賊軍の鳳閣舎人の職につけられている。そのため、再び肅宗によって唐王朝の秩序が回復されたとき、偽官となつた罪を問われて、乾元元年（七

五八) 杭州司戸參軍に貶謫されることになる。これより後、李華は節を失つたことと、失意のうちに母親を亡くしたことを傷み、病氣を理由に、官につくことを辞退し、山陽地方に隠居することになる。その当時の生活を李華は「卧疾舟中相里范二侍御先行贈別序」の中で「華也、潦倒龍鍾して、百疾は体に叢まる。衣るに完帛無く、器に兼蔬無し。妻子を以て童僕と為し、笠履を以て車服と為す。並びに穀に由る無くして、舟中に呻吟せり。……況んや、西方の教に服動し、久しく生死の域を齊しうするおや。」と述べている。これからみても李華は仏道に仕え、子弟とともに農事に励み、貧に安んずる生活を終生貫いている。

これまで簡単ではあるが、李華の伝記の要点になる部分だけを述べてきたが、これからも分るように、既に仕官当時から、文章家として名声を博した李華は、安祿山の乱に捲き込まれて、その運命に大きな転換を迫られていることが分る。従つて、安史の乱を一つの焦点にすえて、次に李華の思想と文学について論じてみたいと思う。

ちなみに、彼の文集についてふれておこう。独孤及は「趙郡李公中集序」で、前集十卷、中集二十卷が世に伝わっていると書いているが、原本は南宋の馬端臨が生きた頃には、既に散佚なっていたらしい。そのことは『文献通考』の〈経籍考〉が、李華文集の目録を記載していないことから分る。今日みることのできる『李遐叔文集』四卷は、『四庫全書』別集三に収められているもので、これらは『唐文粹』・『文苑英華』などに収められたものを再編集したものである。以下、李華の資料はこ

れより引くことにする。

二

安史の乱以前にあつて、李華の思想がどのようなものであつたかを考えるについては、元徳秀(六九六―七五四)という人物をぬきにして語ることができない。元徳秀の政治的或いは文学的な著名度は、それ程高くはなかつたが、次にあげている資料からみれば、元徳秀の人柄とその生き方を知ることができるであらう。

元徳秀字紫芝、河南河南人、質厚少縁飾、少孤事母孝、举進士不忍去左右、自負母入京師、既擢第、母亡、廬墓側、食不塩酪、藉無茵席、服除以饑困。(中略)玄宗在東都、醜五鳳楼下、命三百里具令刺史、各以声樂集、是時頗言、帝且第勝負加賞黜、河内太守輩優伎數百、被錦繡或作犀象、瓊譎光麗、徳秀惟樂工數十人联袂歌于爲子、于爲子者徳秀所爲歌也、帝聞異之、歎曰、賢人之言哉、謂宰相曰、河内人其塗炭乎、乃黜太守、徳秀益知名。(中略)房琯每見徳秀、歎息曰、見紫芝眉宇、使人名利之心都尽。蘇源明常語人曰、吾不幸生衰俗、所不耻者識元紫芝也。(中略)李華兄事元徳秀而友蕭穎士・劉迅・及辛華諡曰文行先生、天下高其行不名、謂之元魯山、華於是作三賢論。(『唐書』卷一九四 元徳秀伝)

この伝に見えるように、「玄宗が五鳳楼下で宴会を開いたとき、元徳秀の行為は玄宗に高く評価された」ことは当時の知識人士に、きわめて精神的に大きな影響をあたえたことは『資治

通鑑」がわざわざその記事を伝えていることでもわかるであろう。元徳秀の伝をみると「自ら母を負いて京師に入り」「母亡するや墓旁に廬し、食するに塩酪をもつてせず、藉するに茵席無し」といった行為や、生涯貧に安んじて徳を失なわなかった生き方は、いずれも彼が儒家的な精神に裏付けられた高潔な人となり持っていたことを物語っている。

元徳秀が玄宗皇帝の賞賛をえる名譽に浴した開元二十三年こそ、李華や蕭穎士らが進士に及第した年でもあった。そのため彼等はこぞつて元徳秀に兄事することになる。その他元徳秀を慕つて、蘇源明・房瑄らの著名な文人学者が元徳秀の下に集つたことはそれぞれの本伝に見えている。

李華が晩年著した「三賢論」がその当時の事情をよく伝えている。

余兄事元魯山而友劉蕭二功曹、此三賢者、可謂之達矣。或曰、願聞三子之略、退叔謂曰、元之志行当以道紀天下、劉之志行当以六經誥人心、蕭之志行当以中古易今世。(中略)元之道、劉之深、蕭之志、及於夫子之門、則達者其流也。

以上のことから元徳秀という人物は、儒教的思想を基盤とした高潔な人間性を持ち、李華が若年の頃、その人物からいかに多大な影響を受けたかを知ることができる。

進士及第当時から李華の思想的基盤も儒教を主としていたことは、次の「甲古戰場文」にも現われている。

吾聞夫齊魏徭戍、荆韓召募、萬里奔走、連年暴露、沙草晨牧、河冰夜渡、地闊天長、不知婦路、寄身鋒刃、膂臆誰憚、秦漢而還、多事四夷、中州耗斁、無世無之、古称戎夏、不

抗王師、文教失宣、武臣用奇、奇兵有異於仁義、王道迂闊而莫為。

この「甲古戰場文」は李華の代表作とも言われている。本文中に、李華は深い同情と悲憤をこめた筆調で、昔戰場で戦死した兵卒の悲惨な運命を描いてあますところがない。ここで李華が、言おうとしていることは、戦争を避けるには、ただ仁義を以て、王道を正すことが大切だという論旨にある。これとともに、若年の頃の彼の思想を知ることがかりになる資料に「卜論」と題する論文がある。

夫夫人与天地合其德、与日月合其明、与四时合其序、与鬼神合其吉凶、不当安也。寿而夭之、岂合其德乎、因物求微、岂合其明乎、毒靈介而徼其神、岂合其序乎、假枯骸而決狐疑、岂合其吉凶乎。(中略)夫祭有尸、自虞夏商周不變、戰國蕩古法、祭無尸、尸之重於卜、則明廢龜卜可也。

これは当時の社会で仏教や道教が、世間にもはやされ、龜卜による迷信が流行していたことを儒教の立場から批判したのである。李肇が「唐国史補」巻上の中で、「華著論言龜卜可廢、可謂深識之士」と述べて、李華を有識の士として賞揚したのは彼の「卜論」をふまえてのことであろう。

ここで安祿山の乱以前の李華の文学について考えてみると、さき挙げていた「甲古戰場文」や「卜論」及び「含元殿賦」などの文体をみると、いずれも大変熟練された駢文で表現されている。例えば

鼓衰兮力竭、矢盡兮弦絶。白刃交兮寶刀折、兩軍蹙兮生死決。降矣哉終身夷狄、戰矣哉骨暴沙磧。鳥無声兮山寂々、

夜正長兮風漸々。魂魄結兮天沈々、鬼神聚兮雲幕々。日光
寒兮草短、月色苦兮霜白。傷心慘目、有如是耶？（弔古戰
場文）

のように、四六文で現し、それぞれ綺麗な駢文形式を用いて
対句表現に工夫こらしている。そればかりではない。脚韻も竭
・絶・折・決は同じく屑韻であり、狄・磔・寂・浙・暮もみな
錫韻に属している。これらの対句や声韻及び典故の使用方法か
らみても、乱以前の李華の文章は、いずれも駢文の形式を充分
に満足させるものであった。

さて、このように李華が駢文に熟達したかという理由につい
て考えてみると、もともと李華は門閥貴族出身ではなく、拔擢
してくれる高官貴人もなかったのも、自らの力に頼るしかなく、
世間に認められるには、当時としては意識的に駢文を作り、そ
こで才能を発揮しなければならなかったと考えられる。

こうみてくると、乱以前の李華の作品は、思想的には、既に
儒教に立脚していたが、駢文しか認められなかった、当時の一
般的な社会風潮の中では、その文学者としての意識的古文の文
体にまで昇華されずに終っていたとみることができるのである。

三

次に、安史の乱以後の李華について考えてみると、乱の最中、
李華が賊に拘えられ、鳳閣舎人として偽官に無理矢理付けられ
たことは、それ以後の彼の人生に於いて、言語に尽せないほど
大きな変化を与えたと思われる。例えば、上元年間、李華は朝
廷から数度にわたって、官職につくことを勧められたにもかか

わらず「自らは節を失い、その上母親を亡くしたのに、どうし
て天子の恩寵を受け得ようか」と述べて、固く召請を辞退して
いる。また、このような心境で、淮南に隠栖し、農事にいそし
むことに終始した乱以後の李華の作品をみると、乱以前に
も増して、儒教への志向が一層強くなっていると考えられる。
このことを知らせる資料として、乱中に偽官につけられた罪
を問われて左遷された上元二三年頃の作である「卧疾舟中相里
范二侍御先行贈別序」をあげて次に考察してみよう。

華与二賢早相得、偕修君子之儒、而独無成、偕励人臣之道、
而独失節、偕遇文明之運、而独衰病。（中略）詔書屢下、
促華赴職、稽首震惶、恨無毛羽、左司員外郎張公、侍御史
相里公、殿中侍御史張公、監察御史范公、嚴公、望高職雄、
持斧登車、江湖霜清、道路風起、華也潦倒龍鍾、百疾叢體、
衣無完帛、器無兼蔬、以妻子為童僕、以筮履為車服、並穀
無由、呻吟舟中。（中略）足下、華病不能拜、拳々扣顙、
敬陳先生、况服勸西方之教、久齊生死之域、言其外者、則
儒不成矣。

ここに「華二賢と早に相得たり、偕君子の儒を修めるに、し
かも独り成る無し、偕人臣の道に励めるに、しかも独り節を失
う。偕文明の運に遇うに、しかも独り衰病す。」という言葉か
らもわかるように、従来儒学の道に励んできた自分でありなが
ら、人生半ばにして節を失い、ただ独り儒道を究めようとする
仲間から遅れ、儒道を貫徹することができなかつたことを嘆い
ている。しかも、李華の道を究める志の厳しさは、以下に続く
文章に表によく出ている。「詔書屢々下りて、華を促して職に

赴かしむるも、稽首震惶して、恨むらくは羽毛の無きことを。」
「華也、潦倒龍鍾として百疾体に叢まる。衣には完帛無く、器には兼疏無し。妻子を以て童僕と爲し、笠履を以て車服と爲す。並びに穀は由る無く舟中に呻吟す。……足下、華病みて拝する能はず。」
「其の外の者を言はば則ち儒成らず」とあるように、朝廷からの数度にわたる詔きに対して、「節を失つた者」として最も厳しく自己を断罪し、自らを貧困衰病の道に追い込む李華であった。このことは視点をかえてみるならば、まさしく李華こそ儒教に対して最も真率に、その道を究めようとする姿勢が持続していたことを意味している。李華は、節を失つたことで、儒教の道を全うできなかつたことをぐるしんでいただけに、人間として自己のなかの苦悶の葛藤を少しでも和らげようとして仏教への信仰を一層深めざるを得なかつたのであろう。「西方の教に服勤し、久しく生死の域を齊しくせり」（臥疾舟中相里范二侍御先行贈別序）とは、まさしくその間の事情を訴える悲痛な声であつたといえよう。これは元徳秀が母の喪に服したとき血みどろになつて仏像を描き写経¹に専心したのと質的に同じくするものではなかつたろうか。李華が一方では儒教への思いを募らせながら自己断罪を行いつつ、また一方では仏教に救いを求めていったのである。仏教信者としての李華は次に挙げるように僧侶に関する沢山の碑文、「杭州開元寺新塔碑」²、杭州餘姚縣龍泉寺故大律師碑³、「衢州龍興寺故律師体公碑」⁴、荆州南泉大雲寺故蘭若和尚碑⁵、「故左溪大律師」⁶、潤州天郷寺故大徳雲禪師碑⁷、「揚州龍興寺経律院和尚碑」⁸、潤州鶴林故徑山大師碑銘⁹等々を、このようにして仏教の道に足を入れなが

らも、儒家として既に書きかえることのできない汚点を持つた自分を厳しく断罪しつづけていつていつていっていることは、逆にこの時期以後の李華の生活の中に、儒教がいよいよ厳しく顕在化してきたものと考えられる。このことは、安史の乱以後の李華の作品「三賢論」の中に詠われる李華の心情は、故人の元徳秀、劉迅、蕭穎士を儒教を究める者の賢者として哀惜しているところでも分る。同時に自分自身への哀惜の言葉として読むことができる。このことは単に過去を追懐しているのではなく、現在李華が生きている社会の在り方にも、無言の批判として触れていると取ることとはできないだろうか。「今復た斯の人を求むれば、之有りや之無しや。是必らず之有り。しかも之を察するに未だ克せざるなり。」¹⁰はまさしくその指摘であらう。

更にまた、このような儒教徒としての意識が、いかに晩年の李華の文学思想に反映し、いかに李華が、古作家としての自覚を強めていったかを、知る資料とみられるものに以下四つの資料が挙げられる。その中の一つとして、先ず「揚騎曹集序」¹¹をあげることとする。これは代宗永泰二年（七六六）に書かれた作品である。

開元天宝之間、海内和平、君子得從容於學、以是詞人材碩者衆、然將相屢非其人、化流於苟進成俗、故体道者寡矣。夫子門人、德行言語政事文学四者、無人兼之、雖德尊於芸亦難乎備也、後之學者、希慕先賢、其著也亦名高天下、行修言道以文、吾見其人矣。（中略）君幼孤、事繼母以孝聞、讀書務盡其義、為文務申其志、義盡則君子之道宏矣、志申則君子之信矣。（全唐文卷三二一五）

この引用文の冒頭で「開元天宝の間、海内和平にして君子学に従容たるを得、是を以て詞人材碩なる者衆し。然るに將相屢々其の人に非ず。苟進に化流して俗を成す。故に道を体する者寡し。」と述べているように李華は学を治め秀れた人材となるには儒教の道を究めていなければならないと考えていたことが分る。なお、ここで注目に値するのは、「文行一致論」である。すなわち「夫子の門人、德行・言語・政事・文学の四者、人として得を兼ねる無し。徳は藝よりも尊しと雖も亦太備うる事難し。」と述べるように、孔子の門下生といえども完全なる人物はなかったとし、楊騎曹こそ「行修・言道文を以てす。吾其の人を見る。」と述べ、更に「継母に事うるに孝を以て聞え、書を読めば務めて其の義を尽し、文を為れば務めて其の志を申ぶ。義尽くせば則ち君子の道宏く、志申ぶれば則ち君子の言信なり。」というのがそれである。これは学問文学と実践行為が一致した具体的な人物として、楊騎曹を賛えているのである。この文行一致論は李華の持論であったとみえて、後にあげられる「贈礼部尚書清河孝公崔沔集序」の中でも「文は行を顧み、行は文を顧みる」と述べ、文学を実践行為との密接な関係のなかで論じようとするものである。

また「与外孫崔氏二孩書」に、自分の外孫女にあてた手紙で「君君達が勉強を始めるに当り、先ず詩・礼・論語・孝経から読み始めることが必要である」と説いている。さらに李華の作品の中で「文集、乱離を経て散逸すること多し」の語から明らかに安史の乱を経てから作られたものと思われる作品に「贈礼部尚書清河孝公崔沔集序」がある。これを見ると、一層明確に彼の

文学観を知ることができる。

文章本乎作者、而哀樂繁乎時、本乎作者、六經之志也、繁乎時者、樂文武而哀幽厲也。立身揚名、有国有家、化人成俗、安危存亡、於是乎觀之、宣於志者曰言、飾而成之曰文、有徳之文信、無徳之文詐。（中略）夫子之文章、僂商伝焉、僂商歿而孔伋孟軻作、蓋六經之遺也。屈平宋玉哀而傷、靡而不返、六經之道遞矣。論及後世、力足者不能知之、知之者力或不足、則文義寢以微矣。文顧行、行顧文、此其與於古欤。（中略）見公文章、知公行事、則人倫之敝、治乱之源備矣。豈唯化物諧声為文章而已乎、奉詔修道德經疏、藏於三閣、行乎天下、反魏晉之浮誕、合立言於世教、其於道也至乎哉。（全唐文卷三一五）

これは先ほど述べた文行一致論を倍養する古典が六經であり、その六經を継承し、発展させたのが孟子であることを明かにするもので、彼のめざす文学がどこに基盤をおくものであったかが分るだろう。

また、屈原・宋玉の辞賦文学が現われて以後、文章の道が絶えたとする考え方は、林田慎之助氏の「韓愈における発憤著書の説」（九州大学『文学研究』第七十輯）にすでに指摘されているように、韓愈の文学思想にもそのままなっている。その観点から、魏晉時代の文学の浮誕な風潮を否定する文学史観が出てくるのも当然である。この李華の文学史観に対して、同じ古文家である蕭穎士の意見は異なっている。李華の「揚州功曹蕭穎士文集序」によれば、蕭穎士の魏晉六朝文学に対する評価は次のようである。

君以為六經之後、有屈原宋玉、文甚雄壯而不能經、厥後有賈誼揚雄用意頗深、斑彪識理、張衡宏曠、曹植豐贍、王粲超逸、稽康標舉、此外皆金相玉質、所尚或殊、不能備舉、左思詩賦、有雅頌遺風、干宝著論、近於王化根源、此後夔絕無聞焉、近日陳子昂、文体最正、以此而言、見君之述作矣。

李華が上述のように孟子以後をはつきりと切り捨てるのに対して、蕭穎士は「屈宋の雄壯」「賈誼・揚雄の用意頗深」「斑彪の識理」「張衡の宏曠」「曹植の豐贍」「王粲の超逸」「稽康の標舉」「左思の詩賦、雅頌の遺風有り」「干宝の著論、王化の根源に近い」というように、魏晉六朝の文学に対しても、彼独特の偏向性にみちた文学史観ではあるが、この時代の文学をひととなみに否定することなく、一定の評価を与えている。こうみても、李華の文学史観は蕭穎士のものとは大いに異っており、この点李華の儒家的な文学思想は、その原基点を經典に置いており、その意味では蕭穎士にくらべて、より儒家的な文学観において徹底したものであったといえる。李華の文学観に関して、明代の楊慎は次のように評価している。

慎謂華之論文簡而盡、韓退之與人論文諸書、遠不及也。清、陳鴻瑛撰『全唐文紀事』卷六七引『丹鉛雜錄』

つまり「李華の文を論じたものは、非常に簡潔にして、意を尽している。韓愈をもつても遠く及ばない」と述べて、古文家としての李華の文学論を、韓愈のそれよりも、より高く評価しているのは、李華の文学思想を理解する際に参考になるであ

らう。

そればかりではない。彼の儒教徒としてのきびしい生き方と、そこから出て来る文学思想は、多くの後進に多大な影響をあたえている。

華愛樊士類、名隨以重、若独孤及、韓雲卿、韓會、李紆、柳識、崔祐甫、皇甫冉、謝良弼、朱巨川後至執政顯官。（『唐書』卷二〇三 李華伝）

ここに述べられているように李華は独孤及、韓會、韓雲卿、柳識、朱巨川など多くの後進を官界に推挙している。彼らはいずれも後に古文家として、世間に名をなす文学者たちであり、中でも韓會、韓雲卿は古文運動の領袖韓愈の育ての親であった。このことから、安祿山の乱で、節を失ったとして、頑なに仕官を拒んだ晩年の生活態度のなかに、儒教が本物として生きており、その李華を韓愈につながる古文家たちが、いかに彼を敬い慕っていたかが分るのであろう。

ここで更に重要なことは、安史の乱の屈辱的な体験以後、官僚社会に出ることを拒否してから、作られた李華の文章のいずれをみても、官僚社会で求める駢文的な文体とは、はつきり切れて、古文の文脈がそこに息づいていることである。ここにその例を挙げてみると。

或曰、吾讀古人之書、而求古人之賢、未獲。遐叔謂曰：無世無賢人、其或世教不至淪於風波、雖賢不能自辨、況察者未之究爾。鄭衛方奏、正声間發。極和無味、至文無采。聽者不達、反以為怪譎之音、太師、樂工亦朱顏而止。曼都之姿、雜為顛頽、縑絮蒙蕭艾、醜醜夷倫、自以為陋。此二者、

既病不自明、復求者亦昏、將割其善惡、在遷政化俗、則賢不肖異貫、而後賢者自明、而察者不惑也。(三賢論)

ここに挙げてゐる資料は李華の晩年、つまり安史の乱以後の作品であり、乱以前の駢文的対句表現とは大おいに異つてゐることが分る。この時期に作られた作品は、殆んど自由に論理を述べ、勿論四、六文の韵も意識的になくしてゐることも窺うことができる、言い換れば李華の古文は乱以後に築いたものと言えよう。

最後に、李華が韓愈の現われる以前の古文家として、いかに重要な役割りを果たしたかは、彼の弟子で、唐代古文運動の先驅となつた独孤及が『李遐叔文集』に附した序文「趙郡李公中集序」の中に次のように述べてゐることから窺える。

天宝中、公与蘭陵蕭茂挺、長樂賈幼幾、勃焉復起、用三代文章律度当世、公之作本乎王道、大抵以五経為泉源、抒情性以託諷、然後有歌詠、美教化、獻箴諫、然後有賦頌、隱權衡以辨天下、公是非、然後有論議、至若記叙編録、銘鼎刻石之作、必採其行事、以正褒貶、非夫子之旨不書、故風雅之旨歸、刑政之根本、忠孝之大倫、皆見於詞、然後中古之風復形於今、於是文士馳驚、臆扇波委、二十年間、学者稍厭抑揚黃華、而窺成詔之音者仕伍六、識者謂之文章中興、一公憲啓之。(『全唐文』卷三八八)

この文章を要するに「李華の文学は蕭穎士、賈至らと共に古文を起し、殊に李華のそれは王道に基き五経を泉源としていは。従つて風雅の旨帰、刑政の根本、忠孝の大倫といったものがみな彼の詞の中に見ることが出来る。かくても中古の風が形われ、

文壇に波紋をおこさせた。その後二十余年、文章を学ぶ者の中に、魏晉六朝の駢文を排し、詩経の根源に帰ろうとする者たちが多数出てきた。識者はこれを文章の中興と呼び、これこそ李華の果した偉業である。」と述べられているがこの独孤及の評価こそ李華文学が唐代散文中興の祖であつたことを如実に証言するものである。

註

- (1) 天宝十一載遷監察御史、宰相場国忠支姪所在横猾、華出使、勅按不機、洲縣肅然。(『唐書』卷二〇三李華伝)
- (2) 冬十月、上幸華清宮、十一月癸未、以貴妃姊適崔氏者、為韓国夫人、適裴氏者為虢国夫人、適柳氏者為秦国夫人、三人皆有才色、上呼之為嬖、出入宮掖、並承恩澤、勢傾天下、每命婦入見、玉真公主等、皆不敢就位、三姊與鉅、鑄五家、凡有請託、府縣承迎、峻於制敕、四方賂遺、輻湊其門、惟恐居後、朝夕如市、十宅諸王、及百孫院昏嫁、皆以錢千、賂韓・裴使請、無不如意、競開第舍、極其壯麗、一室之費、動踰千萬、既成、見它人有勝己者、輒毀而改為、虢国尤豪蕩、一旦帥工徒突入韋嗣立宅、即撤去旧屋、自為新第、但授韋氏以陳地十畝而已云云。(『資治通鑑』卷二二六)
- (3) 上元中以左補闕司封員外郎召之、華喟然曰、烏有節危親欲荷天子寵乎、稱疾不拜。(『唐書』李華伝)
- (4) 李華の「元魯山墓碣銘并序」に「既過苴臬、刺血書佛像寫経、以不賢之身、申罔極之報、食無塩酪、居無爪鷄者三年」がある。
- (5) 李華の「三賢論」に「今復求斯人、有之無之、是必有之、而察之未克也」とある。

林田慎之助氏の「韓愈における發憤著書の説」(九州大学「文学研究」第七十輯)に「儒教の道が孟子で断絶したと考えられるのは必ずしも韓愈の独自の発想ではない。安史の乱を経てはじめて出現した韓・柳の前駆的古文家たち、例えば李華・韓愈の兄韓会の意識の中に、すでに顕在化していた」と述べている。

講義題目

昭和四十七年度

前期

講義	兩漢文学史	岡村教授
"	唐代散文論	林田助教
演習	歴代名画記	岡村教授
"	文選李善注	"
"	樂府詩選	林田助教
"	朱子語類・論文篇	林田助教
"	十五貫	浜口講授
外国語	中国語初歩	(西南大) 樋口講授
"	中国語	"
後期	韓愈の文学	林田助教
講義	文選李善注	岡村教授
演習	清代の詩文	"
"	學術論文批判	"
"	樂府詩選	林田助教
"	小説田間鈔	"
"	海港	浜口教授
"	十五貫	"
外国語	中国語初歩	(西南大) 樋口講授
"	中国語	"
臨講	中国古典小説研究	(東大) 前野講授